

2017 年度 Joint Education Program (ウズベキスタン・スタディツアー) 報告書

1. 概要

■参加人員：学生 15 名（1 年生 13 名、2 年生 2 名）+ 引率教員 2 名（島田志津夫、木村暁） 参加学生は中央アジア専攻所属 12 名（うち 2 年生 2 名）、ロシア専攻所属 2 名、アフリカ専攻所属 1 名。

■日程：2018 年 3 月 13 日～3 月 24 日

■訪問地：サマルカンド（サマルカンド経済サービス大学）、ブハラ（ブハラ国立建築・芸術保護区博物館所属の歴史文化遺産サイト）、タシュケント（タシュケント国立東洋学大学、日本人墓地、ウズベキスタン日本センター）

■実施日程表：

3/13 (火)	成田 09:10 発 ソウル経由 タシュケント 19:20 着	タシュケント泊
14 (水)	列車移動 タシュケント 08:00 発 サマルカンド 10:08 着 午前：サマルカンド経済サービス大学にて学生交流 午後：同大学の学生らの案内により歴史文化遺産サイトを見学	サマルカンド泊
15 (木)	午前：サマルカンド経済サービス大学の学生らの案内により歴史文化遺産サイトを見学 午後：民家（同大学学生の知人宅）で学生交流、調理実習（伝統料理ピチャク、プロフの調理）	サマルカンド泊
16 (金)	列車移動 サマルカンド 09:43 発 ブハラ 11:17 着 午前・午後：ブハラ大学の学生の案内によりブハラ国立建築・芸術保護区博物館に所属する歴史文化遺産サイトを見学	ブハラ泊
17 (土)	午前・午後：学生各自の課題にしたがってブハラ国立建築・芸術保護区博物館に所属する歴史文化遺産サイトを自主見学	ブハラ泊
18 (日)	午前・午後：ウズベキスタン日本センターブハラ分室日本語講師の案内によりブハラ国立建築・芸術保護区博物館に所属する歴史文化遺産サイトを見学 列車移動 ブハラ 15:52 発 タシュケント 19:40 着	タシュケント泊
19 (月)	午前：タシュケント国立東洋学大学にて学生交流（顔合わせ、グループ分け） 午後：同上（趣旨説明、グループ活動の課題設定）	タシュケント泊
20 (火)	午前・午後：グループごとにそれぞれの課題にしたがってグループ活動	タシュケント泊
21 (水)	午前・午後：グループごとにそれぞれの課題にしたがってグループ活動	タシュケント泊
22 (木)	午前：グループ活動（成果発表のプレゼンの準備） 午後：東洋学大学にて各グループによる成果発表のプレゼン 夜：東洋学大学と本学の参加学生全員の会食	タシュケント泊
23 (金)	午前：グループ活動（市内見学） 午後：日本人墓地、ウズベキスタン日本センター見学（JETRO 事務所長による講演） タシュケント 21:20 発	機中泊

24 (土)	ソウル経由 成田 12:30 着 解散
--------	------------------------

※各都市ホテル宿泊

2. 事前学習

1月25日(木)の2~5限、および2月27日(火)の3~5限の時間に事前学習をおこなった。1月25日の事前学習では、担当教員からスタディツアーの概要説明、参加にあたっての注意事項の解説をおこなうとともに、参加学生15名を3名ずつ5グループに分け、次回の事前学習までに各グループでウズベキスタンに関わるテーマで調べてくることを指示した。また、担当教員によって、ウズベク語の初歩を教える授業(島田)と、3月17日に自主見学の実施が予定されるプハラの歴史と文化遺産についての授業(木村)がおこなわれた。さらに、ウズベキスタンを紹介する映像の視聴もおこなった。

2回目の2月27日の事前学習では、5つのグループそれぞれが以下のテーマで調べてきたことについてプレゼンをおこなった。

- Aグループ： タシュケント
- Bグループ： ウズベキスタンの料理
- Cグループ： ナウルーズ
- Dグループ： ウズベキスタンの服飾
- Eグループ： サマルカンド

事前学習では、これから訪問するウズベキスタンについてあらかじめ必要となる知識や情報の共有を図るとともに、学生各自ならびに各グループが現地で調べるべきことを確認し合い、実地の視察に向けて十分な準備をすることができた。

3. スタディツアー

3.0. タシュケント (3月13日)

13日早朝、成田空港で集合し、ソウルを経由して晩に無事タシュケントに到着した。現地集合の学生たちも無事到着しており、参加学生・教員全員が予定どおりウズベキスタン・ホテルに投宿した。

3.1. サマルカンド (3月14日~16日)

14日午前、タシュケントからサマルカンドへ列車で移動。サマルカンドでは、JICA 青年海外協力隊員の穴戸麻理子氏から事前に得ていたご協力により、サマルカンド経済サービス大学およびサマルカンド外国語大学の学生たちと学生交流をおこなった(経済サービス大学にはウズベキスタンで唯一の観光学科があり、穴戸氏は観光開発の指導のために派遣されていたが、ちょうど本学スタディツアー直前に任期満了により離任されていた)。ユネスコの世界文化遺産に指定されているサマルカンドは豊富な観光資源を有し、年間を通じて世界各国から多数の観光客が訪れる。そうした条件を活用するかたちで経済サービス大学では学生たちが実習として旅行会社を運営しており、前回と同様に今回もまた、サマルカンド滞在分については穴戸氏の仲介のもてこの旅行会社にアレンジをお願いした。サマルカンド外国語大

学には日本語学科があり、外国語大学の学生とは日本語で、経済サービス大学の学生とは英語等で交流をおこなった。



サマルカンド経済サービス大学、サマルカンド国立外国語大学の学生のみなさんと（サマルカンド経済サービス大学講堂にて）



学生どうしの懇談の様子（サマルカンド経済サービス大学にて）

サマルカンドに到着後すぐに訪れた経済サービス大学では、大学講堂において本学のスタディツアーに合わせた学生交流フォーラムが開催された。まずアスラノヴァ副学長より開会の挨拶があり、ついで本学引率教員より挨拶をおこなった。その後、サマルカンド側の二大学の学生が所属大学やサマルカンドの町を紹介するプレゼンを英語と日本語でおこない、ついで本学1年生の学生2名が東京の町並みや日常生活、インフラなどを紹介するプレゼンを日本語でおこなった（サマルカンド外国語大学の学生が現地語に通訳）。プレゼン終了後、別室に場所を移してウズベキスタンの伝統的なお菓子や日本から持参したお菓子をつまみながら、自由に学生同士の交流をおこなった。引率教員2名は経済サービス大学の観光学科の教員の方々と懇談をもち、今後の学術交流の発展を期して意見交換をおこなった。午後は、先方の学生たちと一緒に、サマルカンド外国語大学卒業生サルヴィニサー氏の解説のもとグーリ・アミール廟やレギスタン広場、ビービーハニム・モスクなど市内の歴史文化遺産サイトを見学した。



サマルカンドのレギスタン広場での見学風景（ウルグベク・マドラサを背景にして）

15日午前、引き続き先方学生たちとサルヴィニサー氏の案内によりイスラーム・カリーモフ前大統領の墓所、シャーヒ・ズィンダ廟、ウルグベク天文台（博物館併設）、アフラスィヤーブ博物館等の歴史文化遺産サイトを見学し、適宜引率教員からも解説を補足した。午後は、先方学生の知人宅を訪問し、一般家庭の生活に触れる体験学習をおこなった。この時期は、ちょうどウズベキスタンの伝統的な祭日であるナウルーズ（春分祭；3月21日）が迫っていたこともあり、調理実習として季節の伝統食ピチャクを作る体験をしたり、伝統料理プロフ（ピラフ）の調理実演の見学をおこなった。料理ができあがるのを待つ間、双方の学生がゲームをおこなったり、現地の新婚の花嫁の挨拶儀礼が実演されたりしたほか、新郎新婦の衣装の試着体験もおこなわれた。夕食に自分たちが作った料理を食べた後は、踊りや歌を披露し合ったり、懇談がしばらくつづけられ、和やかな雰囲気の中で密な交流がもたれた。

3. 2. ブハラ (3月16日～18日)

16日朝、サマルカンドから次の訪問地ブハラへ列車で移動した。ブハラでは3日間にわたって、ユネスコ世界文化遺産に指定されている数々の歴史文化遺産サイト（ブハラ国立建築・芸術保護区博物館の管轄）を見学した。サマルカンドからの到着後すぐ、ブハラ大学で日本語を学ぶ学生ムニーラ氏（最近開催されたウズベキスタンの日本語弁論大会2位入賞）と合流し、同氏の案内のもとブハラ旧市街のチャール・ミナル・マドラサ、コカルダシュ・マドラサ（ブハラ最大規模）、ナーディル・ディーヴァーンベギ・マドラサ、隊商宿跡、シナゴーク、旧両替商バザール、かつてのモスク（マガーキ・アッターリー・モスク）を利用した絨毯博物館などを見学した。コカルダシュ・マドラサ内部にあるブハラ文学史博物館には本学の小松久男特別教授（前年度スタディツアー引率教員）の著書が展示してあり、本学学生は意外な接点があることを発見して感心した様子であった。その後、舞踊団ブハラーチャによるブハラ独特の民族舞踊や歌謡・演奏のコンサートを鑑賞し、伝統芸術に触れた。

17日は終日、学生が各自の目的と課題にしたがい、ブハラ旧市街の歴史文化遺産各所を自主見学した。多くの学生がサーマーン王家廟（中央アジア最古のイスラーム建築遺構）、アルク城（ブハラ・アミール国君主の居城跡。現在は博物館）、カラーン・モスク（ブハラ最大級）とそれに併設されたカラーン・ミナレット、ミーリ・アラブ・マドラサ（現在も宗教教育機関として機能）、旧金細工師バザール、旧帽子商バザールなどを見学し、1世紀前までは中央アジアの政治・経済・宗教の中心地であったブハラの歴史を肌で感じ取ったようである。引率教員2名は、ブハラ大学教員で旧知の研究者であるベフルーズ・クルバーノフ氏らと面談の機会をもち、研究上の情報・意見交換をおこなった。

18日は午前から、ウズベキスタン日本センターブハラ分室のマフムードフ講師と同室スタッフのフィリップ氏の案内を得ながら、旧市街周辺の主要な史跡をバスでめぐった。まずバハーウッディーン・ナクシュバンド廟を訪れたが、このブハラの守護聖者の墓所はウズベキスタン各地からの参詣者でたいへんにぎわっていた。マフムードフ講師の導きのもと、本学学生も現地の参詣者がおこなう作法での参詣と祈祷の実地体験をすることができた。ついでブハラ・アミールの離宮跡であるスイターライ・マーヒ・ハーサ宮殿を訪れ、ブハラ風とロシア風の折衷様式の多用された離宮建築群を見学した。午後はチャール・バクル（スーフィーの名家の家族墓地）を見学し、その後、鉄道駅に移動し、列車でタシュケントへ向かった。

ブハラの各歴史文化遺産サイトでは引率教員による解説も適宜おこない、サマルカンドとはまた雰囲気異なる歴史都市について見聞と理解を深める格好の機会となった。

3. 3. タシュケント (3月18日～23日)

18日夕刻にブハラから列車で無事タシュケントに到着した。

タシュケントでは、協定校であるタシュケント国立東洋学大学日本語講座の学生たちと4日間にわたって学生交流をおこなった。前年度の例にならう、本学の参加学生の主体が1年生であること、また先

方大学日本語講座の学生たちの希望にしたがって、学生交流の際の媒介言語は日本語とした。学生交流の実施にあたっては、やはり前年度と同様、先方大学の日本語講座の先生方から全面的な協力をいただいた。先方大学には事前の準備として、日本語を勉強している学生の中から本学参加学生と同数の15名を選抜し、3人ずつ5グループに分けておいていただいた。



グループワーク初日の様子（タシュケント国立東洋学大学にて）

19日午前、宿泊先ホテルに東洋学大学の学生たちが出迎えにきてくれ、双方の学生の対面になった。昼食をはさみつつ自己紹介と簡単な打ち合わせをおこなったうえで東洋学大学に移動し、マッチャノフ日本語講座長の挨拶で学生交流会がスタートした。日本に留学経験のある先方大学4年生の司会のもと、当方引率教員による挨拶と趣旨説明、先方大学学生によるウズベキスタンの伝統舞踊の披露、春分祭ナウルズを紹介するプレゼン、伝統料理プロフを紹介するプレゼンがつづいた。その後、交換留学制度を利用して2017年9月から東洋学大学に留学中の本学中央アジア専攻3年生3名が、留学生活について、日々の授業や課外の過ごし方などの体験をまじえながらプレゼンをおこなった。ついで、本学のスタディツアー参加学生のうち1年生の一同がソーラン節を元気よく実演した。さらに、2年生の2名が日本のかんざしの挿し方を実演し、先方大学の女子学生たちを招き寄せてミニ講習をおこなった。その後、先方学生3名と本学学生3名の合計6名ずつの混成グループを5つ作り、グループごとに話し合いがもたれ、4日間の活動テーマとその実施方法が決定された。

20日と21日は、グループごとに設定したテーマにしたがってそれぞれ自由に調査活動をおこなった。たとえば、「現代的」と「歴史的」をキーワードにタシュケント市内の商業施設を例にその相違の現れ方について調査したグループ、現地学生との突っ込んだ意見交換や議論を通じて日本とウズベキスタン両

国の若者の恋愛観、恋愛・結婚事情について比較検討したグループ、タシュケントの各種交通機関を実地に利用調査したグループなどがあつた。引率教員は各晩、宿舎に戻つた学生たちからその日の活動の報告を受け、グループワークの進捗状況について確認をおこなつた。また、昼間に学生たちがグループ行動をしている間に、引率教員は本学からタシュケント国立東洋学大学に派遣留学中の学生たちと会い、留学中の学習状況や生活状況について話を聞き、適宜アドバイスをおこなつた。さらに、ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所を訪問し、旧知の研究者たちと面会し、意見・情報交換をおこなうなどした。

学生交流の最終日である22日は、4日間の活動の成果についてグループごとに発表をおこなつた。午前中はグループごとにプレゼン資料（パワーポイント）の準備をおこない、午後には東洋学大学にて成果発表のプレゼンをおこなつた。各グループの発表題目は以下のとおり。

- A グループ： タシュケントの現代的な場所と歴史的な場所の比較
- B グループ： ウズベキスタンと日本の若者の比較
- C グループ： タシュケントの交通事情
- D グループ： タシュケントと東京のサービスの比較
- E グループ： ナウルーズ：日本のお正月との比較

たとえば、Cグループはタシュケントでの実地の交通機関利用体験を活かしながら、タクシー、バス、地下鉄それぞれの機能や料金制度がウズベキスタンと日本でなぜ、どのように違うのかを具体的に検討し、両国の交通機関ごとのメリットとデメリットを的確に指摘してみせた。またDグループは、両国のサービスの質的な違いに注目し、そこにはそれぞれの文化に根ざす、接客そのものに対する考え方の違いがあることを指摘した。優劣や善し悪しという価値判断を差し控えながら、両国における接客態度をそれぞれの国の思想文化になじんだ合理主義的行動の表れとして説明する冷静なとらえ方は、グループ内双方の学生間の相互理解のたまものといえる。Eグループは、まさに滞在時期がナウルーズのタイミングに当たっていたのを利用してウズベキスタンにおけるその祝い方や過ごし方を現地見聞にもとづいて考察し、これを日本のお正月の例と比較した。両者でともに凧揚げがおこなわれるという共通性、また、ウズベキスタンのスマラク（小麦の芽を長時間煮詰めた伝統的食品）作りも日本の餅つきもたいてい親類や近所の共同作業でおこなわれるという類似点が指摘されている点は興味深かつた。A～Eグループのプレゼンの合間には、先方大学の学生による民族舞踊の披露、新婚の花嫁の挨拶儀礼の実演、日本の現代歌謡曲の歌唱がおこなわれた。また、ナウルーズの風物詩ともなっているウズベク語の流行歌（その名も「ナウルーズ」）を、先方学生の熱心な手ほどきのもと当方の学生と教員が即席で声に出して歌うという刺激的な試みもなされ、「心は喜び、心は喜び、嬉々とし、嬉々とし、彩られる」という歌詞の一節さながらに会場は盛り上がった。学生交流会を閉会するにあたっては、日本語講座のクルバノヴァ講師の挨拶、菅野玲子准教授の総括、本学引率教員の挨拶がおこなわれ、記念撮影をもって会は成功裡に終了した。夕刻には、双方の参加学生全員、引率教員、および先方日本語講座の教員が一同に会食をおこない、親睦を深めた。



グループワークの成果発表の様子（タシュケント国立東洋学大学にて）



タシュケント国立東洋学大学の学生、教員のみなさんと（タシュケント国立東洋学大学にて）

23日は午前中の時間を帰国準備および各自の市内見学に当てたうえで、正午少し前から日本人墓地の見学をおこなった。まず墓地の敷地に隣接する、日本人抑留者を記念した資料館を訪れ、抑留者とその墓地の歴史に関する45分間の日本語による記録映画を視聴した。その後、館長スルターノフ氏の案内で資料展示室を見学した。そのさい、スルターノフ氏みずからが多数の資料の来歴や意味についてじつに丁寧に解説してくださった（引率教員が日本語に通訳）。このあと広大な霊園の一角に位置する日本人墓地に移動し、ウズベキスタンの地で命を落とした抑留者を追悼した。スルターノフ氏が繰り返し述べられたように、日本人抑留者の誠実さと勤勉さは今もウズベキスタンの人々の記憶に刻まれ、彼らが建設にたずさわった多くの建造物が今現在も利用されている（最も有名な例がナヴァーイー劇場）。

その後、JICAがウズベキスタンと共同で運営しているウズベキスタン日本センターを訪問し、前年度と同様、高田裕彦所長より同センターの活動内容について詳細に説明していただいた。同センターは、一般向けの日本語講座や文化イベント、書籍により日本文化について紹介・発信しているだけでなく、ビジネス・セミナーを開催して日本のビジネス・ノウハウ等を広めようとしていることが大きな特徴である。ついで、同センターの一室を会場としてお借りするかたちで、日本貿易振興機構（JETRO）タシュケント事務所長の下社学氏から「中央アジアの最新経済動向」と題する特別講演をおこなっていただいた。現地経験豊富で事情に深く通じた専門家による講演はきわめて明快かつポイントが凝縮されており、参加学生は経済の側面からウズベキスタン、ひいては中央アジアをよりよく理解するためのたしかな視座を得ることができた。

以上をもってスタディツアーのウズベキスタンにおける全日程は終了した。夕食後、空港に向かい帰国の途につき、翌24日成田に到着後、解散した。

4. まとめ

今回、前年度につづく2回目の試みとして、日本学生支援機構海外留学支援制度スーパーグローバル大学創成支援（グローバル化牽引型）プログラムの予算によりウズベキスタンへのスタディツアーを実施した。幸いなことに、目立って体調を崩す者もなく、ほとんどトラブルもなく終了することができた。今回もまた学生交流を非常に順調に実施することができたのは、協定校であるタシュケント国立東洋学大学の日本語講座の先生方の協力と、サマルカンドの宍戸元隊員の協力のおかげである。あらためて感謝したい。また、協定校の先生方からこれほどの協力と歓迎を得られたのは、本学と協定校の長年にわたる留学生交換の実績の裏付けとも言える。サマルカンドとタシュケントにおける学生交流では、双方の学生が相互理解を存分に深めることができた。それにとどまらず、いずれのケースにおいても学生たちのあいだから、この交流を今後も強化し恒常化させていこうという掛け声がいくつも聞かれた。これはまさに学生たち自身が友好と信頼の架け橋になりつつあることを予感させる。このスタディツアーの大きな収穫の一つといえるだろう。

参加学生からは、のちほどアンケートをおこないレスポンスを調査する予定であるが、概ね好評価が得られた。参加学生の主体である1年生たちは、実際に現地を訪れ、現地の人々と交流したことを通じ

て、翌年度から始まるウズベク語の学習へのモチベーションをかなり高めたようである。中央アジアについてもっと深く勉強したいという声や、またあらためてウズベキスタンを訪れたいという声も聞かれた。また、2年生たちは、ウズベク語学習における具体的な課題や、自身が関心を寄せるテーマに関する新たな目的意識や着想を得たようであり、今後の研鑽が期待される。とくにウズベキスタンへの派遣留学が決まっている2年生の参加者は、留学前に現地に行くことにより留学のイメージをより具体的なものにし、留学の目的を明確化する動機にもなったようである。

学生交流は先方の大学にも大変好評であり、継続して受け入れたいとの要望があったので、予算が許すかぎり次年度以降も継続してスタディツアーを実施したいと考えている。

中央アジア専攻担当教員

島田 志津夫

木村 暁